

# 母乳哺育を阻害している要因に関する研究

——新生児期・乳児期の栄養方法に関する調査 (1)——

Study on inhibiting factors on the promotion of breastfeeding

——Investigation about the nutrition method of a newborn baby period  
and infant period (The first report)——

坂 本 保 子

**要約** 就学前の幼児をもつ599名の母親を対象に、新生児・乳幼児の栄養方法について質問紙調査を行い、母乳哺育率と同時に母乳哺育を阻害している要因を明らかにすることを目的とした。その結果、出生から産科施設退院までの栄養方法では混合栄養が最も多く65.2%、完全母乳栄養が23.5%、母乳栄養が8.7%、人工栄養が2.6%であった。母乳哺育を成功させるためには、母子同室、頻回授乳が最も大切とされている。今回の調査では、分娩後ですぐに授乳させた母親は33%、母子同室は、81%であった。また生後1週間までの授乳で「泣いたらいつでもあげる」が48%、「1日8回授乳」が21%であり母乳哺育継続のための条件をそなえていた。しかしながら生後3か月までの栄養方法では、完全母乳栄養が30%に対し混合栄養が52%を占めていた。退院後母親に対してさまざまなストレスが加わって母乳分泌を低下させていったのではないかと考えられた。

## I. はじめに

昔から母乳栄養は新生児・乳児にとって最良の栄養物であると考えられている。しかし、1970年になって、社会および産業構造の変化、人工乳の改良等により母乳栄養率が世界的に低下してきた。丁度そのころ母乳中に分泌型IgAをはじめ、ラクトフェリン、リゾチーム、細胞成分などの感染防御物質の発

見が相次ぎ、母乳の大切さを見直す研究が続き、母乳哺育推進運動がアメリカやスウェーデンでおこり、その後わが国でも起こってきた。さらにWHO/UNICEFの提唱によって母乳哺育(Breastfeeding)運動が世界的に加速されてきている。そして母乳哺育をつづける産科医療機関に対して、WHOは「赤ちゃ

んにやさしい病院」(BabyFriendly Hospital: BFH)の称号を与えて、母乳哺育推進をサポートしている。ところが、生まれたすべての子どもたちに母乳を与えられていず、人工乳を安易に与える傾向になってきている佐野<sup>16)</sup>、植地<sup>1)2)</sup>。哺乳類の中でもマウスやブタなどはヒトと胎盤構造が違うために、経胎盤的に免疫物質が仔マウスや仔ブタに移行せず、初乳だけから免疫物質が仔マウスや仔ブタに移行する。そのため出生後に親の初乳を飲まなければ仔マウスや仔ブタは重い感染症にかかり死亡するのである。ヒトでは、妊娠後半にIgGのみが終胎盤的に移行し、出生後母乳からは特殊な構造をした分泌型IgAが移行するため、初乳を飲ませないと仔マウスや仔ブタのように、すぐに感染症で死亡するというのではない。ミルク会社の宣伝によって「人工乳が母乳とほぼ同じものである」と

いう偏った考えが子育てをする母親たちに浸透して、母乳が出ている人でも人工乳に変えてしまうことが多い。母乳哺育推進は沢山の要因によって阻害されてきているのが現状であろう。

今日までに、母乳哺育継続を阻害する要因に関する研究は沢山なされている。即ち、その主な要因として、母親自身および母乳そのものの要因、子ども自身の要因、子どもおよび母親を取り巻く環境の要因などがあげられており、それに関して山崎、入山、濱岸ら<sup>10)</sup>の報告がみられる。出産前は、96%に近い母親が母乳育児を望んでいる。ところが産後自宅に帰ると、生後1か月で42.5%に減少してしまうといわれている<sup>4)</sup>。このことは、母親に加わる種々のストレスが母乳分泌を減少させて母乳哺育をやめさせてしまうと考えられる。

## II. 研究目的

母乳哺育推進を阻害する要因には、児側・母親および母乳そのものの要因、児および母親を取りまく環境要因などさまざまな要因が存在していると思われる。その要因が単独的にまたは複雑に絡み合っ

て母乳哺育をしている母親に影響を与えているために、母乳哺育率が低下してくるものと想像される。そこで、母乳哺育率を知ると同時にやむを得ず母乳哺育をやめていった状況を知る目的で、実態調査を試みた。

## III. 研究方法

1. 研究デザイン: 自記式質問紙票による量的記述研究  
2. 調査期間及び対象者: 保育園児の母親 599名

3. 調査機関: 2012年8月～2012年8月31日  
4. 調査対象: S県A市地域の保育所をアトラランダムに選び、そこに通園している子ども

もの母親 599 名。

5. 調査方法：S 県 A 市の保育園を通園している子どもの母親を対象に「新生児期・乳児期の栄養方法」に関する無記名の自己記入式調査紙を作成し一部は郵送で、一部は保育園ごとに配布し回収した。

6. 調査内容：先行研究田川、植地<sup>7)</sup>の調査に使用されている調査票をもとに作成した。その内容は、「授乳方法」の項目、栄養方法に関する項目、母乳をやめた理由についての項目（「子ども自身の問題」、「母親自身および母乳および母乳そのものの問題」、「子どもおよび母親をとりまく環境の問題」）、育児休業の項目、出生 2 週間から 1 か月までの栄養方法についての項目などである。各項目について、対象者が考えていることを、1 つまたは複数回答を求めた。

7. 分析方法：回収したデータは、エクセル、SPSSver.20 を使用し、2 群の比較には t

検定を相関関係には、Spearman 順位相関を使用した。有意水準は、危険率 5% 未満とした。

8. 倫理的配慮：本研究の調査に先立ち、保育園施設長に研究目的、方法、個人情報に関すること、守秘義務、研究の意義、研究協力や拒否が可能であることを説明し、研究協力の承認を得て保護者への説明依頼文を配布してもらい調査協力を依頼した。また、研究への協力は任意であり、拒否や中止ができること、またそれにより影響はないこと、知り得た個人情報は保護し調査は無記名とし調査に同意を得られた後に調査用紙に記入してもらい各自が封筒に入れ、個人や施設が特定されないように無記名で回収・返信してもらうこととした。調査用紙は、集計し、統計処理後切断し破棄した。集計結果論文作成のためと関係学会発表以外使用しないことを書面にて同意を得て倫理的配慮した。

## IV. 結 果

### 1. 回収率・有効回答率

協力の得られた保育園（11 園）にアンケート調査用紙を配布した。配布数は 1,091 枚で 610 枚が回収でき回収率 56.3% であった。そのうち有効回答数は 610 であった。アンケート用紙を記入した保護者は、母親 599 名（98%）父親 9 名（2%）、祖父 1 名、祖母 1 名であった。子育て中の母親に関するアンケート調査目的のため、母親 599 名を以後の分析の対象とした。

#### 1) 母親の年齢

母親の年齢群分布では、30～34 歳群が 194

名（32%）と最も多く、次いで 35～39 歳群が 165 名（28%）、25～29 歳群が 120 名（20%）、40～44 歳群が 70 名（12%）、20～24 歳群が 24 名（4%）、45 歳以上群が 25 名（4%）、19 歳未満群が 1 名であった（図 1）。

#### 2) 母親の職業

母親の職業分布は、公務員・会社員が 253 名（42%）と最も多く次いでパートタイマーが 222 名（37%）、無職が 55 名（9%）、自営業が 23 名（4%）、その他が 41 名（7%）、無回答 5 名の順であった（図 2）。

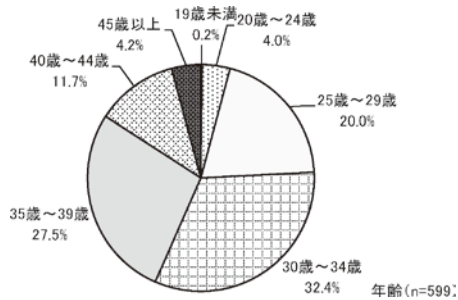


図1 年齢の分布

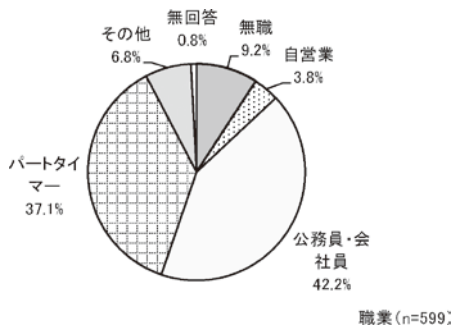


図2 職業の分布

### 3) 育児休業の有無

育児休業の有無では、育児休業をとったと答えた母親は328名(55%)であり、育児休業がないと答えた母親は230名(38%)、無回答は41名(7%)であった。

### 4) 育児休業期間

育児休業期間をとったと回答した母親は、10か月～12か月が108名と最も多く、次いで12～24か月56名、6～10か月38名、3か月31名、6か月27名、2か月23名、4か月8名、6か月8名、1か月4名の順であった。

### 5) 家族形態

家族形態では核家族が435名(73%)と最も多く、次いで3世代127名(21%)であった。4世代は20名(3%)と少なかった。そ

の他11名(2%)、無回答4名(1%)であった。

## 2. 栄養方法および母乳継続期間、母乳哺育阻害要因に関する母親の認識についての調査成績

栄養方法および母乳継続期間、母乳哺育阻害要因に関する母親の認識について調査した。その結果は以下の通りである。

### 1) 母親が赤ちゃんのときの栄養方法

母親が赤ちゃんのときの栄養方法は、混合栄養が196名(33%)と最も多く、次いで完全母乳栄養が145名(24%)、母乳栄養が132名(22%)、人工栄養が103名(17%)の順であった。

### 2) 出生順位

第1子は296名(49%)と最も多く、次いで第2子209名(35%)、第3子66名(11%)、第4子10名(2%)、第5子3名(1%)の順であった。

### 3) 分娩後の授乳時期

分娩後分娩台の上ですぐに授乳させた人は195名(33%)と最も多く、次いで分娩後24時間179名(30%)、分娩後48時間が87名(15%)、分娩後2時間が45名(8%)の順であった。

### 4) 母子同室の有無

母子同室の有無では、486名(81%)が母子同室をしており、110名(18%)が母子同室をしていなかった。

### 5) 生後1週間までの母乳授乳回数

生後1週間までの母乳授乳回数では、「泣いたらいつでもあげる」が285名(48%)で最も多くて約半分を占め、次いで1日8回が128名(21%)、1日6回が62名(10%)、1日12回が57名(10%)、その他が54名(9%)

表1 出生から6か月頃までの栄養方法及び母乳の回数

上段：回答者数 下段：%	1回	3回	6回	その他	無回答	計
完全母乳	0 0.0%	12 8.5%	74 52.1%	49 34.5%	7 4.9%	142 100.0%
母乳栄養	0 0.0%	5 10.6%	32 68.1%	8 17.0%	2 4.3%	47 100.0%
混合栄養	18 6.9%	72 27.7%	97 37.3%	63 24.2%	10 3.8%	260 100.0%
人工栄養	7 5.1%	6 4.4%	25 18.4%	83 61.0%	15 11.0%	136 100.0%
無回答	0 0.0%	2 12.5%	3 18.8%	7 43.8%	4 25.0%	16 100.0%
計	25 4.2%	97 16.2%	231 38.6%	208 34.7%	38 6.3%	599 100.0%

であった。

出生から出生6か月までの栄養方法及び母乳回数のクロス表は表1に示す（表1）。

#### 6) 母乳の継続期間

母乳の継続期間では、その他が292名（49%）で最も多く、次いで分娩後6か月が118名（20%）、分娩後3か月88名（15%）、分娩後1か月53名（9%）の順であった。「その他」292名の内訳は、1歳が73名、7か月～11か月が49名、1歳2か月～1歳6か月が32名、2歳が21名、継続中が16名、2か月が11名、4か月が11名、3歳が9名、2歳5か月～2歳8か月が6名などであった。

#### 7) 栄養方法について

(1) 出生から産科施設退院まで 出生から産科施設退院までの栄養方法では母乳のほかに少なくとも1回以上の粉ミルクが与えられていた場合を混合栄養とすると混合栄養は

375（65.2%）名と最も多く、次いで完全母乳栄養が135名（23.5%）、母乳栄養が50名（8.7%）、人工栄養が15名（2.6%）、無回答が24名の順であった。

(2) 出生から2週間頃までの栄養方法 出生から2週間頃までの栄養方法は、混合栄養が387名（68.3%）と最も多く、次いで完全母乳栄養144名（25.4%）、母乳栄養36名（6.3%）の順であった。

(3) 生後2週間から1か月までの栄養方法 生後2週間から1か月までの栄養方法では、混合栄養が362名（66.8%）と最も多く、完全母乳栄養は132名（24.4%）、母乳栄養36名（6.6%）、人工栄養12名（2.2%）の順であった。

(4) 出生から3か月までの栄養方法 出生から3か月までの栄養方法では、混合栄養が314名（52%）と最も多く、次いで完全母

乳栄養 178 名 (30%)、人工栄養が 55 名 (9%)、母乳栄養が 47 名 (8%) の順であった。

(5) 出生から 6 か月までの栄養方法 出生から 6 か月までの栄養方法は、混合栄養が 231 名 (39%) と最も多く、人工栄養が 208 名 (35%)、母乳栄養が 97 名 (16%)、完全母乳栄養が 25 名 (4%) の順であった。

(6) 生後 6 か月頃の母乳授乳回数 生後 6 か月頃の母乳授乳回数は 1 日 6 回が 260 名 (43%) で最も多く、次いで 1 日 1 回が 142 名 (24%)、1 日 3 回が 47 名 (8%) の順であった。

#### 8) 母乳をやめた理由

(1) 子ども自身の問題の場合では、「母乳を子どもが飲まなくなった」が 109 件と最も多かった。次「その他」が 86 件と多く、次いで「母乳を飲んで子どもが泣きやまない」が 28 件であった。「その他」86 件の内訳は、「卒乳」、「離乳食を始めたから」、「乳首をうまく吸えなかった」、「歯が生えてきた」などであった (図 3)。

(2) 母親自身および母乳そのもの問題の場合では、「母乳が途中からでなくなった」が 108 件と最も多く、次いで「母乳が出ない」が 70 件、「自己判断」39 件、「母乳不足感」が 39 件、「乳房・乳頭の外傷」が 19 件、「体

調不良」が 10 件、「疲労」が 15 件、「乳房・乳頭の形状に異常がある」が 5 件、「感染症」が 3 件、「病気」が 7 件、「薬物」が 2 件、「その他」は 19 件であった。「その他」19 件の内訳は、「仕事のため」がほとんどであった (図 4)。

(3) 子どもおよび母親をとりまく環境の問題の場合では、「仕事復帰したから」が 157 件と最も多く、次いで「次の子の妊娠」が 32 件だった。「周りの人にやめるように言われた」からが 12 件、「産科施設」が 10 件、「母子同室でなかった」が 9 件の順であった (図 5)。

#### 9) 母乳継続期間との関連

以上の結果を母乳継続期間との関連を分析した。以下の結果は表 2 に示す。母乳継続期間と核家族に関する得点 ( $r_s = 0.075, P < 0.001$ ) であり低い正の相関が認められた。出産時の初回授乳時間と母乳継続期間との関連は、( $r_s = -.114, P < 0.001$ ) であり負の相関がみられた。休業の有無との相関は ( $r_s = -.090, P < 0.05$ ) 負の相関がみられた。職業の有無と休業期間は ( $r_s = .079, P < 0.05$ ) であった。母親の栄養方法と児の栄養方法との関連は ( $r_s = .165, P < 0.001$ ) であった。

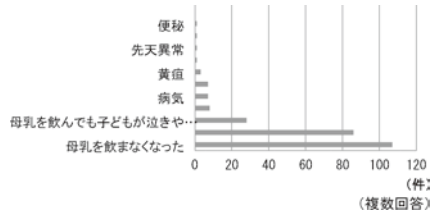


図3 子ども自身の問題

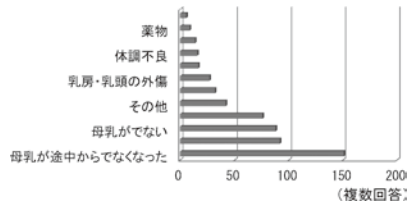


図4 母親自身の問題

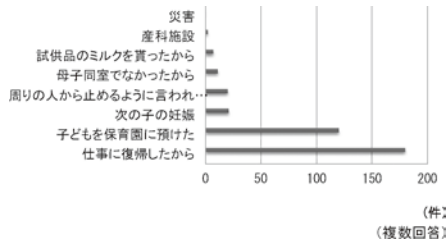


図5 環境の問題

表2 母乳継続期間との相関係数

		職業	休業期間	母乳継続期間
Spearman のロー	職業	1.000	.079*	.006
	相関係数			
	有意確率 (片側)		.026	.446
	N	599	599	599
休業期間	休業期間	.079*	1.000	-.039
	相関係数			
	有意確率 (片側)	.026		.171
	N	599	599	599
母乳継続期間	母乳継続期間	.006	-.039	1.000
	相関係数			
	有意確率 (片側)	.446	.171	
	N	599	599	599

\*.  $P < 0.05$

## V. 考 察

本研究では、母乳栄養率を知ると同時に、母乳哺育継続を阻害している要因に関するアンケートによる実態調査研究を試み、若干の成績を得た。

アンケート用紙に回答してもらった母親599名を分析対象とした。母親の年齢は、30歳～34歳群が32%と最も多く、次に35歳～39歳群28%であった。母親の職業は公務員・会社員が42%、パートタイマーが37%となっている。母親の年代が若ければ若いほど就業意識が強く、就業機会も多いため就業復帰する母親が多いことが推測される。そのため母乳哺育継続期間は短いのではと予測されたが、職業の有無によって母乳哺育継続期間が異なることがわかった。家族形態では、核家族が73%を占めていた。核家族に比べて同居の方が育児をしやすい環境であることから母乳継続が長いと予測されたが結果では相関は得られなかった ( $rs = n.s.$ )。

### 1. 栄養方法および母乳継続期間、母乳哺育継続の阻害要因に関する調査研究成績

1) 栄養方法および母乳継続期間に関して  
母乳哺育を成功させるためには、母子同室、頻回授乳が最も大切なこととされている。今回の調査では、分娩後分娩台の上ですぐに授乳させた母親は33%であった。また生後1週間までの授乳で「泣いたらいつでもあげる」が48%、「1日8回授乳」が21%になっており、母乳哺育継続のための条件をそなえていた。しかしながら生後3か月までの栄養方法では、完全母乳栄養が30%に対して混合栄養

が52%を占めていた。母子同室により退院後も母乳継続可能性が高いのではと予測されたが調査の結果有意差は認められなかった。退院後母親に対してさまざまなストレスが加わって母乳分泌を低下させ、その結果として母乳栄養から混合栄養へシフトしていったと思われる。

### 2) 母乳栄養継続をやめた要因の分析

母乳栄養をやめた要因について回答（複数回答）を求めた。要因として、子ども側の要因、母親側の要因、子どもおよび母親を取り巻く環境要因などがあげられている。今回のアンケート調査では、子ども側の要因として、「子どもが母乳を飲まなくなった」（109件）、「母乳を飲んでも泣き止まない」（28件）があげられた。母乳栄養を中止する病態があまり障害になっていないことが判明した。母乳哺育を継続する上での医学的適応を母親および母乳そのものの要因として、「母乳が途中で出なくなった」（108件）、「母乳がでない」（70件）、「母乳不足感」（39件）など母乳不足と思っている母親の多いことがわかった。「乳房・乳頭トラブル」や「疲労」は、意外に少ないことがわかった。堀内<sup>9)</sup>の調査の成績でも出産後の疲労は出産2日目頃がピークであり乳汁分泌が本格化するのは3日目以降でその頃は疲労感がなくなっていくことを報告している。また「自己判断」が39件いたことは注目すべきことであろう。子どもおよび母親を取り巻く環境要因として、「仕事に復帰したから」が157件と最も多かった。また、母乳と人工乳とは同じ栄養成分であるものと考えを持っている母親のいることも明ら



かになった。また雇用条件によって育児獲得時間の確保が難しいため母乳哺育継続期間が短いと推測される。調査結果では、母乳継続期間と育児休業の関連では低い負の相関で

あった。この地域では早く仕事に復帰しなければならぬ社会環境のあることも推測され、今後改善してゆくべき課題と思われる。

## VI. 終 わ り に

この調査では、母乳哺育率と同時に母乳哺育を阻害している要因を明らかにすることを目的とした。その結果、母乳の継続期間では、分娩後6か月が118名（20%）、分娩後3か月88名（15%）、分娩後1か月53名（9%）の順であった。「その他」292名の内訳は、1歳が73名、7か月～11か月が49名、1歳2か月～1歳6か月が32名、2歳が21名、継続中が16名、2か月が11名、4か月が11名、3歳が9名、2歳5か月～2歳8か月が6名などであることが明らかになった。阻害要因では、「子どもが泣き止まない」、「母乳が途

中からでなくなった」「仕事に復帰したから」などの要因が挙げられた。育児休業を取っている母親が約半数いたこと、パートタイマーの職業をもっている母親が約半数いたにも拘らず産科施設退院時点で母乳栄養率が約30%に低下してしまうこと<sup>5)</sup>はこの地域では早く仕事に復帰しなければならぬ社会環境であるこの地域特有の現象と思われる。このような現象がこの地域だけにみられるものなのかどうか、今後さらに地域を広げて検討してゆくべきことと思われる。

## 謝 辞

この研究にご協力くださいました保育園施設長、先生方、ならびに保護者の皆様方に心

より感謝申し上げます。

## 文 献

- 1) 植地正文（2007）：話題提供 子育て中の母親と周産期医療に関係している医師の「母乳栄養と補足」に対する認識度の比較—神奈川県における実態調査成績を中心に—、日本母乳哺育学会雑誌、1(2)：123-135
- 2) 植地正文（2011）：「完全母乳栄養」だけが真の科学的な母乳栄養である、日本母乳哺育学会雑誌、5(1)：1-2

- 3) American Academy of Pediatrics, Policy statement Breastfeeding and the use of Human Milk (2005): Pediatrics, 115: 496-506
- 4) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課 (2006): 平成 17 年度乳幼児栄養調査報告 <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/06/ho629-1.html> (最終閲覧: 2013.12.1)
- 5) 坂本保子 (2011): 母乳哺育を阻害する要因に関する研究、東京福祉大学・大学院修士論文
- 6) 佐野葉子 (2009): ヒトの新生児・乳児における栄養方法に関する研究 —母乳哺育に対する認識を中心に—、東京福祉大学・大学院、平成 21 年度修士論文、1-94
- 7) 田川悦子・植地正文 (2007): 「母乳哺育」に対する子育て中の母親の意識に関する研究、日本母乳哺育学会雑誌、1(2): 95-110
- 8) WHO/UNICEF: Protecting promoting and supporting breastfeeding: The special role of maternity facilities (1989)
- 9) 堀内 勁 (2002): 特集 1. 一般新生児の話題、母乳育児—母乳育児の常識と非常識—、小児科診療、65(3): 387-392
- 10) 山崎真紀子、入山茂美、濱寄真由美、本多洋子 (2010): 産褥早期の母親の Sense of Coherence (SOC) と母乳育児自己効力感および母乳育児負担感の関係、保健学研究、22(2): 45-50